

# ミステリ読書案内

2024. 12. 19 発行元

第623号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## アンドリュウ・ガーヴ「ベスト表」(再掲)

1950年に『ヒルダよ眠れ』でスタートしたイギリスのサスペンス作家アンドリュウ・ガーヴの『ベスト表』を再度取り上げてみることにする。私はそれほど多くは読んでいないのだけれども…。「悪女もの」…。

### イギリスのサスペンス作家

今はもう忘れ去られつつある作家なのだろうか。SNS上でも作家紹介の詳しい記述は出てこないし、古書市場にもあまり出回っていない印象を受ける。下に取り上げた『ヒルダよ眠れ』と『遠い砂』以外の作品は希少価値でまあまあ値段がついているようである。

アンドリュウ・ガーヴ名義の他にロジャー・ボックス名義、ポール・ソマーズ名義の作品があるようだが私は読んでいない。日本語訳があるのかもわからない。

あまり私好みの作家ではない。『ギャラウエイ事件』などは謎解き要素が組み込まれているが、基本的には巻き込まれ型のサスペンスの作家。その意味ではフランスミステリ風の雰囲気。テレビドラマや映画向きの作品と言えるだろう。

私の好みは名探偵が登場する本格ミステリとか、私立探偵が失踪人を探し歩くハードボイルド、団円で組織的に捜査する警察小説である。素人が犯罪に巻き込まれ、悪人に振り回され、訳の分からないうちに深みにはまり翻弄されるストーリーは好みではない。

### 《アンドリュウ・ガーヴのベスト表》

1. ヒルダよ眠れ
2. ギャラウエイ事件
3. カッカー線事件
4. 遠い砂
5. サムソン島の謎
6. メグストン計画
7. 道の果て
8. 黄金の褒賞
9. 地下洞
10. レアンドの英雄
11. 新聞社殺人事件
12. 死と空と

いずれも、ポケミスのかみステリ文庫の形で、早川書房から出ている。今は手に入るのだろうか？

犯罪に巻き込まれた人物の心情分析や犯罪者の深層心理描写等を求めることはない。基本的には起きた事実と人々の実際の行動を描いてもらえればよいということ。

### 「ヒルダよ眠れ」

1950年の作。ハヤカワ・ポケミスの310番、そして早川書房の世界ミステリ全集8に収録されているが、私の手元にある本は1979年のハヤカワ・ミステリ文庫版。ガーヴ名義のミステリとしての出発点。ハドリー・チェイスの『悪女イブ』、カトリーヌ・アルレーの『わらの女』と並ぶ“悪女もの”ミステリの代表作に挙げられることが多い。その意味で印象深い作品。

冒頭、帰宅したジョージ・ランバートが妻のヒルダがガス・オープンに頭を突っ込んで死亡しているのを発見する。警察やってきて捜査が始まり、ヒルダが舌を噛んでいることや首筋に傷があることなどがわかってくる。ランバートへの質問が始まるのだが、市の建設局に勤めていた彼は夕方講演会に行く予定だったが気が変わって映画館へ行っていたと証言。また、娘のジューンは精神病になって病院に入院しているという。ここからランバートに不利な事実が浮かび上がってくるのだが…。ランバートはドイツから帰国した友人のマックス・イースターブルックに助けを求める…。そしていろんな情報を集めていくと妻のヒルダがどんな人物だったのかが少しずつ見えてくるようになる。犯人は？という謎があるものの、ヒルダの隠されていた本性を明らかにしていく展開が本作品の中心になっている。人間の謎を探るサスペンスということだろうか。

### 「遠い砂」

1960年の作。ハヤカワ・ポケミスの768番が初訳だが、私の手元にある本は1980年のハヤカワ・ミステリ文庫版。本書はこの年よみうりテレビで『渚の女』という題名でドラマ化され、そのスチル写真が文庫の表紙になっている。浅丘ルリ子・古谷一行が主演。

「ぼく」として登場してくるのは若き外交官のジェームズ・レニスン。のちに妻となるキャロルとの出会いはライン川の河畔。ロンドンに帰還し彼女と結婚する流れに。そして、彼女には双子の姉がいることを聞く。容姿も性格もよく似通っているという…。結婚式が終わってしばらくしてから、彼女は姉夫妻が住んでいるノーフォークを訪ねたいと言い出した。姉はフェイといい、富豪のアーサー・ラムズデンと結婚していた。ある日、アーサーはヨットで沖に出たまま行方不明になる。フェイもまたどこへ行ったかわからなくなってしまふ…。しばらくしてアーサーが事故死したかのような様子で発見された。フェイの方も遺体が見つかるのだが…。どうも、フェイがアーサーを殺して財産を奪おうとした形跡が残されているような…。ジェームズは傍にいる妻のキャロルもまた悪事に走るような疑念を抱きながらも、事件の真相を見出そうとしていく…。